

令和元年度第1回大船渡市地域助け合い創出研究会 グループワークまとめ

盛地区グループ

- ・社会性が大事だということを痛感した。仕事を辞めて、社会との繋がりが切れるのはさみしい。
 - ・自分は～が出来なくなると聞いて、出来ることもあるがどこまでやっていいのか。あっちもこっちもとなると…。やってもいいが、止めているところもある。声に出していきたい。
 - ・隣に独居男性がおり、ゴミだらけの時があった。近所の女性達が自然発生的に話し合いをしたことがあった。そのまま地域流が出来ており、意識していない。班毎に出来ているのかも。組織立てると「役がきた！」になる。
 - ・「ご近所ヘルパー」は取り組みそうだが…いつまで出来るのか、どれくらい集まるのか未知数である。きっかけを作れば。集まって、力をつけることが必要か。
- ごみ収集車とか、ご近所レベルの集まり
- 若い人もいと持続出来る。入ってもらうのは難しい。
- ・地域で全く違う。若い人がいるところは力がある。結束力がある。
 - ・「よいとり」の考え方が今のお年寄りにはない。若い人の力で補わないと。
 - ・古内電器さんでサロンをやっている。地域の人が多く入っているサロンはある。七夕とかお宝は多い。
 - ・近所で一人暮らしになった人がいると、近所で見守りをしている。回覧を持っていきながら、声をかけるとか。
 - ・本町なでしこレディース(若い女性)が出来た。見守りにも繋げたい。女性部だと1世帯1人で、お嫁さんが遠目に見ている感じ。

大船渡地区グループ

- ・釜石では、最初に取り組んだのは釜石市社協とのことだが、当市であればどのように取り組んだらいいか。包括か？助け合い協議会か？社協か？
- ⇒マップ作りを希望すれば、社協が教えに来てくれる。
- ・大船渡地区支え合い協議会で、ゴミ出しを始めようとしている。手始め、とっかかりに。ここから広げ関心が高まればいい。
 - ・困っていることが寄せられない。婦人部に集まってもらっても、30人のうち7、8人しか集まらないので、困っていることがわからない。
 - ・以前に、マップ作りの研修を受けたが、どうなっているのか。平地域は、困っている人を拾い出せない。表面的なことだけで、隠れているものの掘り起こしが出来ていない。見守りとかに役立つマップを作れるならやってみたい。
 - ・今年度から月一回のお茶っこ会を始めた。皆の話を聞く機会としたいと考えている。マップにはまだ手をつけられないかな。人の好き嫌いがあり、簡単には進まないかなと思う。
 - ・住民が自分らしく暮らすために、興味はあるがマップを作ってプライバシーも出てきてしまうのでは。

見られたくない・・・とか。地域には世話役もいるので、どう進めていくか。

- ・75 世帯の大船渡病院宿舎を抱えている。住民票を移していない人や公民館費を払わない人がいて苦労している。75 歳以上は 50 人はいる。
- ・大船渡市地域助け合い協議会の委員をしている。世話役は必ずいる。自分のためにも今、おせっかいをしている。
- ・赤沢地域は世帯数が多い。やる時にどのような区分けをしていったらいいか。3~4 つに分けるのがいいのか。
- ・自分は、3~4 年前に大船渡に戻ってきた。今日、地域に帰ったら、今日の研修で学んだことを話して、住みやすい地域にしたい。
- ・なんでもかんでも「ふくし」と聞こえる。そういうのは、どうかなと思っている。
- ・以前、大船渡では、どこでも「防災マップ」を作ったものだ。支え合いマップは防災マップと同じようなもの。特別に何をしなければならないということではないと思う。

大船渡地区支え合い協議会でアンケートをとって見たが、支え合いマップを作ることによって、色々なことがみえてくると思う。フォローするだけでも支え合いになると思う。

- ・マップを作るのは、40 世帯くらいということであれば、地ノ森一区は 4~5 つに分けなければならない。モデル地域として、おせっかい 4~5 人探してやってみたらいいかと思った。

→出来るところからやってみるといいか。

- ・住民支え合いマップは、防災マップやサロンとは違うかもしれないが、グループの中でのおせっかいやきを探して、やってみてもいいかな。
- ・平一区、二区は 200 世帯以上ある。お茶のみやっているところへ行くと、色々情報をもらえるが、民生委員の立場で行くと、話せないこともあると、教えてもらえないこともある。平を分ける方法、分け方をどうしていったらいいか。
- ・台町は支え手を確保するのが難しい。それを探すが、第一にやるべきこと。

末崎地区グループ

- ・「ご近所ヘルパー」の取り組みについて知りたい。どんな人になり、具体的な活動内容や頻度を知りたい。

⇒

- ・住民支え合いマップの振り返りの集まりをする際に、地域の方にどのように周知・広報し、どのくらいの人が集まったのか。

⇒

- ・末崎地区では、まだ支え合いマップ作りはしていない。6 月 24 日に、社協職員を講師にサロン作りの勉強会を開催した。参加者は公民館長、婦人会、健康づくり推進員から各地域 2 名。次は、支え合いマップ作りをしたいと話合った。
- ・支え合いマップ作りは、地域の資源を探ることと知り、大いに活用したい。支え合いは昔は地域にあった。

たもので根付いていた。生活が豊かでなかったから、支え合いが出来ていた。今は、核家族・豊かになり、他人に干渉されたくないとの意識を持つ人もいて、難しくなっている。

- ・切実な問題であり、勉強になった。
- ・中野、平地域は異動が多く、世帯全体を把握するのは難しく、困っている。マップ作りは必要である。
- ・震災後の新しい住民がわからない。
- ・個人的な関わりの中で分かってくることもあり、名前を聞けば分かるが……。マップ作りは必要である。
- ・勉強して、助け合いの方向へ持っていきたい。
- ・助け合いをどうするか、年数を重ねてきた。日頃市地区のマップ作りの振り返りの集まりに参加した。何故マップ作りが必要なのか、地域の世帯 80 世帯を 1 つの単位としているが、その全ての世帯に伝え、理解してもらうことが必要と思う。せめて、半分でも参加してもらえればと思う。
- ・平地域公民館は、180 世帯から 230 世帯に増えた。元々広い地域で、人との繋がりが薄い。どのようにしていったらよいか。
- ・末崎は高齢者が多く、小学生が珍しい。スーパー等がなく買い物や通院が大変である。どのように支え合っていくかが大事。
- ・在宅介護支援センターで介護サービスに繋がるまでの援助等を行っている。

山田町での研修会に参加し、今回で 2 回目の学びであり、今後の研修会には参加予定である。支え合いは必要なことと誰もが思っていることだが、個人情報の問題等もある。助けられる側と助ける側との関係では、言葉には出さないが遠慮がある。相互なんだよという気づきが必要。その気づきは、形や文章になっていないので、理解しにくいもの。玄関を開けないような人でも相互という関係づくりは出来るのでは。

赤崎・蛸ノ浦地区グループ

- ・マップ作りは良いことだが、取りかかりまでが大変である。
- ・困り事を聞き出すのが難しい。(隠す、みんなに話されるのが困る)
- ・成功は地域性に左右される。
- ・サロンに来られない人は状況把握出来ない。
- ・男性の一人暮らしは生活状況が見えにくい。
- ・声がけのタイミングが難しい。おせっかいの度合いが難しい。
- ・お茶飲みの中心が世話焼きさん(キーパーソン)

→ここから輪を広げていきたい。

- ・マップ作りで浮かんだ課題の解決がまだである。
- ・アンケートには限界がある。マップ作りはその部分を補完出来るのではないか。
- ・マップ作りに消防団員が参加、若い人が参加するのは良いこと。
- ・マップ作りが終着点ではなく、どう活用するのが大切。

猪川地区グループ

- ・マップ作りをすることによって、地域の見直しができる。同じ地域の端と端で分からず、発見出来ない人もいるだろう。見直しすることによって、手を差し伸べる、見えなかった所に目が行くのではないかな。
- ・地区のマップ作り携わってみると、住民主体で話してもらおうと、息子の所に行ったきり帰ってこない、徘徊がある人がいて、それなら散歩がてらに見守りしようと話してくれたりしている。ご近所同士の声掛けが震災時のようにまたあればいいのではないかな。
- ・具体的な実践の事例が分かりやすかった。マップは、先日、市内で作ったのを見たり指導を受けたりしたが、そのマップは全体的に大きく、色々な情報が入っていた。色々入りすぎて、かえって分かりにくいように感じた。班毎とか、1・2班毎と目的を限定して、1枚目は一人暮らし、2枚目を重ねるとハンディのある方、3枚目を重ねると困窮者とか、何枚か重ねた時に分かりやすくするなど、作り方の工夫を考えたほうが良いのでは。
- ・民生委員の訪問を待っている人がいる。来ないと病気になったのではないかと心配してくれる。その方と信頼関係を作らないと個人的な話はしてくれない。かなりの時間を要するのでは・・・。
- ・マップ作りにはあまり関わったことはないが、一人暮らし、認知症の方をマップにすることで共有出来ていいと思う。振り返りも大切だと思った。
- ・介護事業所の立場なので、地域の方がどのような活動をしているのかが分からないので、今日参加して良かった。ヘルパーさんが入ると、地域の方が遠慮するという話があったが、優先されるのは家族や地域の人。それで足りない時は、私達が入ると考えている。時間や出来ることが限られているので、出来ない部分を皆さんの力でやっていただくと助かると思った。地域の人がやってくれるのは助かるなあと感じた。
- ・夫婦のどちらかが介護をしている人がストレスを抱えた人が家族の会に相談してくることが多い。話をしていくことでスッキリして介護をがんばれる人がいる。
- ・自分の地域では、夫が亡くなった家に、3～4人で手伝いに行ったら、おばあちゃんが認知症になっていた。認知症で病院に通院している状態だったが、家族は仕事をしているため、「地域に公表しなさい。隠さないで」と家族にアドバイスしたが、本人は認知があるのを知られたくないからとサロンにも行きたがらない。支え合いというものは難しいと感じた。偶然、葬儀で認知症だと分かったが、家族が隠していたら、その情報も分からずにいただろう、情報の吸い上げも難しいと感じた。
- ・マップ作りで、守秘義務で話せない情報は地域では共有できるのだろうか。最近、守秘義務が大きな壁になっていると感じる。そういう中でのマップ作りは大変なのではないだろうか。このマップはどこで活用するのか。
- ・主婦の情報からマップ作りを始める。守秘義務のようなことは聞き出せない。お茶飲み程度で情報共有する。
- ・マップの情報に、うちのおばあちゃんは認知症と書かれるのが嫌な人もいるのでは。プライバシーの問題。
- ・作ってから活用するまでの方法をどのようにするのか、考える必要がある。

立根地区グループ

- ・井戸端会議の延長と言いつつ、社協がまとめているのはなぜか。
⇒社協に仕切ってほしいという意見が出たため。
- ・住民流のマップ作りは、必要な情報、要らない情報の選別が難しいかもしれない。
- ・被災して立根に引っ越してきた人の把握が大変ではないか。下欠と関谷のアパートが出来たので、町民が600名くらい増えている。関わりを拒否する人も多い。
- ・一人暮らしのマップ作ってみたい。→社協とのかかわり、すり合わせが必要。
- ・平成30年度末に立根地区助け合い協議会で実施したアンケートの結果について、現在、地域の回覧板で回している。それぞれの地域におろす。戸数が少なければ少ないなりの難しさはある。
- ・回覧版を持っていきながら、見守りしている。頼まれたわけではなく勝手にやっている。鍵を預かっている家もある。
- ・町場地域では、助け合いの会を平成23年2月に5人で立ち上げ、その後マップ作りを行った。震災をきっかけに作成した)ゼンリンのデジタル化されたマップを活用。2万円くらいかかる。赤い羽根の補助金を利用。役職を持った人に印をつけている。〇〇さんを支えてくれている人、名前や電話番号を入力。作ったマップは、A3用紙に拡大し、立ち上げメンバー4~5人で保有している。現在24世帯くらい。遠方に住む子の連絡先、兄弟などをマップとは別の枠に入力している。個人情報の同意書はもらっている。マップの更新(頻度)が課題。原稿化もしていない。

日頃市地区グループ

- ・既にやっている事でもあるが、地域資源・人材の掘り起こしがマップによって問題点を突き詰めていくのかなり有効と感じている。ただし、福祉マップと支え合いマップが違うというのが、わからない。同じではないのか。
⇒福祉マップは困っている人のマップ、支え合いマップはそれを線で繋ぐもの。
- ・マップ作りに参加してみて、要援護者も含めたマップと感じている。
広げていけばきりが無い。有事の際などの防災マップ
いろいろつなぎ合わせていくものとは思ふ。最初の一步
方法として、何もかもとなるよりテーマを決めて作っていくことが取り組みやすいのではないかと。点と線の違いではないかと思った。
- ・坂本沢は、亡くなる人、怪我をしてしまう人、数ヶ月の間で、ガラッと変わってしまう。
それらの中で、近所の人助け合い等が生まれていた。有償ではない。
支え合いマップも常に見直ししていくことが必要である。作って終わりではない。
- ・課題を共有する際に、ゴミステーションが遠いという話が出たため、マップ作りの中で出た問題として地域公民館長に掛け合い、市へ連絡、集落支援員が確認しに来たが、収集車の迂回路、市有地等様々な課題があった。それらのこともマップ作りをしたから出たもの。

- ・ゴミ出しは有償ではないが、草取りをしてくれたりしている。
- ・マップ作りの中で、地域の問題点が出てきた。
鷹生地域では、神楽等、昔の賑わいがほしい等の声が出た。郷土芸能が地域のつながりにもなっていると感じた。
- ・何を課題とすればいいか、これからマップ作りに取り組もうとしている所
- ・若い世代が出てこない。
- ・日頃市の人みんな協力的。サロンをやっている、休む人がいると、休んだ人の所に見に行ってくれる。心配してくれる。
- ・サロンに出て来られない人への対応は課題。食事会をしても出てくるのは女性。食事時になると準備のため帰る。出られない人が何故出られないのか。

三陸地区グループ

- ・マップ作りを行ったが、課題が出てくるとその先に進めないことがあった。どのように課題に繋げていったのか。
- ⇒住民が担えるところを担えばよい。役割分担。本人の楽しさやその人の「人となり」・生きがいを見出す。
- ・マップ作りをしての反省点として、マップ作りの構成員により、情報が深すぎた。→言い過ぎは困る。
福祉マップと要援護者マップは違うという視点
マップ作りの時にどっちになるか、その場で仕切ってくれる人がいない。
やってみないと分からない。そのマップは社協が持っていってしまうので、その後の反省が出来ない。
- ⇒前もって約束事を決めること。定期的に考えること。地域、行政、社協と一緒にやっていくことが必要である。
- ・自分達の出来ることがあるかと思えたが、具体的にどういう風に動けばいいのか、自分の地域に合わせるとどうすればいいか。
- ・個人の家に入っていくことはハードルが高いと思っていたが、ちょっとしたことで良いと気づき、軽くなった。やっていけると思った。
- ・自主的に活動するのが難しいと思う。1つにまとめるのが、なかなか出来ない。見習って少しずつ活動出来たらよい。
- ・最後の独居の困り事～聞いて対応していくことが大事。マップ作りにより、そこがわかってくると思った。
- ・訪問拒否がある。簡単に訪問出来ないところがある。住民に理解してもらうことが必要と感じた。
- ・マップ作りは良い活動だと思う。防災マップ等、様々あるが高齢者の支え合いマップは是非必要だと思う。
- ・地域で出来ること、公民館で出来ること、近所で出来ることの進め方が何となくわかってきた。最終的には近所の支え合いへ。越喜来地区では、現在アンケート結果をまとめる段階。地域別の仕分け、年代

別の仕分け、細かなアンケート結果を作成したい。

マップ作りから、やっていかなければならないことが見えてくると思う。

- 近所のつながりは既にある。安否確認のための配布物を毎月、これを広げていけばよいのだと分かった。
- 綾里地区は、アンケートは終了し、データをまとめた。
マップ作りを始めている。一つの地域で交流や助け合いをしていた。知らないところで助け合いが行われていた。他の地域ではこれから。